AP/FD NEWS LETTER

横浜国立大学
高大接続・全学教育推進センター

2022.2 Vol.17

ウィズ＆ポストコロナ時代における授業のグットプラクティス事例集　特集号

CONTENTS

P1　巻頭言　「学生の主体的学び」のための新しい授業のあり方
高大接続・全学教育推進センター　センター長　関谷　隆夫

P2　ウィズ＆ポストコロナ時代における授業のグットプラクティス事例集
P2　講義科目
P5　演習科目
P7　実習・実技科目

P8　CENTER NEWS

「学生の主体的学び」のための新しい授業のあり方

高大接続・全学教育推進センター　センター長　関谷　隆夫

近年、高大接続・全学教育推進センターでは、各授業科目の詳細な授業計画とともに成績評価基準を予め示すことで準備学習等を推進するための「シラバス」の充実と、それに基づく「成績評価の厳格化」の推進、学生から個々の授業内容の改善を提案するためのツールとしての「授業アンケート」の実施と分析、個々の学生が自らの学修の進展を電子的に記録する「YNU 学生ポートフォリオ」や，そこに記録されている様々なデータを集約して，学士力や就業力を可視化する「学生プロファイル」の整備とその分析などの事業を進めています。これらはすべて、「学生の主体的学び」を推進・定着するための活動といっても過言ではないでしょう。

これは、次々と生み出される新技術と現在の技術の陳腐化のサイクルの早さ、インターネットをはじめとするサイバー空間に蓄積され続ける知識の氾濫とスマートフォンで検索すればそれら必要な知識が簡単に入手できる即時性を有した昨今の発展著しい社会情勢の中では、大学で何を学ばせ、何を知識として授ければよいのか、といった教育の目標が見失われつつある状況に対応するものと考えています。学生が『自ら目標を設定して主体的に学ぶ力』を身に付けさせる教育の重要性をご理解いただきたいと思います。この力を身に付けさせることは、目標設定すらままならず、実は難しい。主体的な学びを阻害している要因は何なのでしょう。教えすぎであったり、学生に考えさせずに簡単に答えを与えてしまったりすることにあるという指摘があります。学生は本来学ぶ意欲を持っていて、目標にそれが嵌れば、寝食を忘れるほどに主体的な学びに没頭します。目標を達成した充実感と課題解決による感動を、学生に経験させることが必要なのではないかと思います。学生にそのようなやる気の火を点ける授業展開を行うことが、教員として求められていると思うのです。

2020年春からコロナ禍に見舞われた日本では、遠隔による授業が中心となり、それ以前の授業方法の大転換が行われました。思えば、コロナ禍以前から、文部科学省は大学における多様なメディアを高度に利用した授業の実施を推奨していました。クラス対応から個人対応型の教育方法への転換と言えるでしょう。ライブ型の授業では他者の目を意識せずに発言でき、オンデマンド型授業では学生が個人個人のペースで繰り返し授業を視聴できるなど、遠隔ならではの授業の利点が多くあります。しかしながら、従来型の面接授業でも教室に集う学生が共に学ぶという姿勢があり、学生の細かな表情、雰囲気を捉えながらの双方向性にも優れていると思います。教員の皆様には、「学生の主体的学び」を実現するため、対面・遠隔の両者の良いところを利用した新しい授業を展開していただくよう、ご理解・ご協力をお願い致します。

ウィズ&ポストコロナ時代における授業のグットプラクティス事例集

本事例集について

「感染防止対策を講じて学内の安全・安心な環境を整えた上で、可能な限り対面授業を実施する」という方針のもと、スタートした2021年度春学期でしたが、新型コロナウイルス感染症の第５波の到来により、秋学期は10月末日までは原則遠隔授業、11月からは「遠隔授業も効果的に活用しつつ、感染拡大防止策を講じた上で対面授業を実施可能」という形で授業が展開されました。2020年度に全面遠隔授業を経験した当初は、「遠隔授業はコロナ対策」という意識を誰しもが持っていたと思いますが、未だ先行きの見えないコロナ禍において、我々は「遠隔授業はコロナ対策」から「新しい授業スタイルのあり方の転換期」という意識に向かうべきなのではないでしょうか。事実、遠隔授業を経験したことで、その数々の利点について多くの先生方が気づきを得ておられるのではないかと思います。まさに、ウィズ&ポストコロナ時代は「対面・遠隔それぞれの利点を活かした授業づくり」が大学教育で求められてくると思います。

そこで、昨年度（2020年度）、本ニュースレター（Vol.15）に掲載した「遠隔授業の好事例集」に引き続き、今回も好事例（グッドプラクティス）の授業をいくつかご紹介したいと思います。今回は、高大接続・全学教育推進センター教育開発・学修支援部会を通して推薦された11の科目のご紹介となります（講義科目６つ、演習科目３つ、実習・実技科目２つ）。なお、今回は、遠隔授業に限らず、対面と遠隔を併用して行った授業も取り上げています。

紙幅の関係上、本稿は“ダイジェスト版”とし、完全版は高大接続・全学教育推進センターのHPに掲載しておりますので、ぜひその完全版をご覧ください。完全版では、各科目について【授業内容】、【授業の実施方法】、【授業準備にあたってのポイント・工夫した点】、【従来の対面授業との違い～学習効果の観点から】の４つの観点からご紹介しています（本稿ではその内、【授業の実施方法】、【授業準備にあたってのポイント・工夫した点】を掲載しており、一部の科目については要約となっています）。

一人でも多くの先生方に、次年度以降の新しい授業づくりのご参考にしていただけましたら幸いです。

この場をお借りして、この度、本事例集への寄稿にご協力くださいました先生方、誠にありがとうございました。

事例集完全版は高大接続・
全学教育推進センターのHPにて公開
https://www.yec.ynu.ac.jp/about/with.html

● 講 義 科 目

《対面・遠隔併用》3科目

科 目 名：有機化学Ⅱ
担当教員名：伊藤　傑先生（理工学部）
履修学年：２年
履修者数：54名

＜授業の実施方法＞

授業方法は概ね下記の流れです：

・講義資料（穴埋め形式）を授業の１週間前にアップロード
・授業当日までに講義資料と教科書を予習してLMSで予習問題に解答（成績評価に含める）
・対面授業は講義形式で、授業後半10分程度で練習問題実施
・練習問題実施中に座席ごとの個別番号を提示。LMSのアンケートに番号を入力することで出席確認&質問受付
・授業終了後からLMSで復習問題に解答可能（何度でも実施可能・成績評価に含めない）
・次回授業の最初に前回授業の予習問題の解説（兼復習）
・授業の途中で休憩を兼ねて前回アンケートでの質問に対する回答の時間（兼復習）を設ける

＜授業準備にあたってのポイント・工夫した点＞

受講する学生が、授業時間外の学習に過度な負担なく取り組むことができるようにすることを重視して設計しました（予習問題は○×問題、復習問題は採点の対象外）。

● 予習に関する工夫

次回授業の最初に前回授業の予習問題を解説することについては、復習も兼ねることに重きを置いています。予習問題の内容は、授業を聞いていれば分かるはずの内容なので、授業中にその回の予習問題の解説に時間を割いてはいません（そもそも授業では、予習では十分に理解できなかったことが、授業を聞けば理解できるようになることを目指しています）。学生のアンケートによると、予習を求める授業はほとんど無いのか、予習問題があることや、授業開始時に前回の復習があることは好評です。

● 対面授業時の工夫

対面授業では、授業の最後にその日の授業内容に関する練習問題を各個人で解いてもらっています。学生同士の意見交換に繋がる方策としては、授業終了時のアンケートに質問を記入してもらい、次回授業で紹介することで、他の学生が分からなかった点や、発展的な質問内容について共有できるようにしています。

● 復習問題を提供する利点

復習問題は採点の対象外としていますが、期末試験終了後には半数強の学生が取り組んでいます。そのうち、毎週の授業終了後に取り組む学生が半数程度、試験前の復習のためにまとめて取り組む学生が半数程度といった印象です。やはり、継続して復習に取り組む学生は、試験の結果もよくなる傾向にあります。

科 目 名：解析学Ⅰ、Ⅱ
担当教員：竹居　正登先生（理工学部）
履修学年：１年
履修者数：104、106名

＜授業の実施方法＞

対面授業を行なうとともに、学生の状況に応じて各自の判断によりオンデマンド動画の視聴による受講も容認しています。オンデマンド動画については、対面講義とは別に毎回作成しています。

講義スライドを穴埋め式に変えたものを作成し、講義前日までにダウンロードできるようにしています。

毎回の演習課題として取り上げる問題は質・量ともに厳選し、それで物足りない学生は自ら問題を探して解くよう指導しています（課題が過大となりやすいため）。課題とともに略解も配布し、自分の答案の添削・検討を行なって、わからなかった部分について質問を記入することを評価基準として明示しています。いずれも、自発的に学びを進めていける力を養うことを主眼においています。

課題の答案のほかに、授業の感想や近況などを書くことも評価に含めており、その代わりになるべく早くコメントを返して学生の励みになるよう努力しています。

＜授業準備にあたってのポイント・工夫した点＞

● 主体的な学びを促す工夫

この２年間は期末試験を行なわず、毎週の演習問題の状況によって成績評価の90%までつけて、残り10%は「自主的レポート等（提出任意）」によって評価してきました。本来は「秀」の評価を目指す学生のためのものですが、〆切に間に合わなかった課題を後から提出してもこの配点の範囲内で救済するなど、柔軟に活用しています。この「自主的レポート等」の形式・内容は本当に何でもいいのですが、自主的な調べものや研究のほか、テキストや問題集の練習に取り組んだ答案なども提出されてきます。その意味で、主体的な学びの様子についてはある程度伝わってきます。

● 評価の工夫

課題の答案のほかに、授業の感想や近況などを書くことも評価に含めていますが、講義を受けたら、面白かったにせよ、難しかったにせよ、つまらなかったにせよ、何かしらの感想をもつはずです。遠隔講義にはお互いの気持ちが見えにくいという欠点がありますから、「何でもいい、ひとことでも書いてほしい」と伝え、それに対して少しでも反応を返すようにしています。講義を受けて課題に取り組むのみならず、講義に対して自分の気持ちがどのように動いたかを書いているか否かを評価の中に含めています。

本学の学生の皆さんは概してとても真面目で、数学等の基礎力も一定以上もっています。一方で、自分の思ったことを表に出すことがそれほど得意でない方が多いようにも見受けられます。「何でもいいからひとこと書ける（言える）」力をつけておくことは、将来役に立つだろうと信じています。

科 目 名：グローバル化と日本人
担当教員：市村　光之先生（大学院教育強化推進センター）
履修学年：１－４年
履修者数：18名

＜授業の実施方法＞

授業回により異なりますが、以下①～④を組み合わせて実施しました。

①事前学習（読書課題）＋対面授業
②対面授業＋事後学修（オンデマンドビデオ講義）
③Zoomを活用した双方向ライブ授業
④オンデマンドビデオ講義

各回の典型的な授業パターンは以下の通りです。

１）前回授業のフィードバック（５分程度）
２）授業内容は２～３のパートに分けて、各パートは受動的に聴く時間（講義）と能動的に作業する時間（ワーク等）を組み合わせる
３）授業終了後に授業アンケート：質問、授業の改善要望、小レポート（授業から考えたこと、400字程度）を授業支援システムから提出

＜授業準備にあたってのポイント・工夫した点＞

● 事前学習（読書課題等）＋対面授業

事前知識として知っておいてもらいたい内容があるときは、１時間程度で読める分量を読書課題として課しました。ワークの準備を課題として課すこともありました。全授業回のうち８回です。コロナ前は履修生の自主性に委ね課題を出すだけで、読んで授業に臨む履修生は６～７割くらいでした。終講時の独自アンケートで意見を求めると、つい読むのを忘れてしまう、感想を書く前提のほうが（教員に見られるので）読む気になる等の声があり、2020年より毎回の授業アンケートに、読んだ感想、考えたことを書かせる（400字程度）ようにしました。2020年度の終講時アンケートでは、書くのは大きな負担にはならず、読むだけよりも自分の考えを整理できてよい、との声が多かったです。読んだ率も９割に向上しました。

● 対面授業＋事後学修

対面授業のワーク等で異文化を実感してから講義するほうが学修効果上がりそうな内容や、授業時間中はワーク等に時間をかけたいときは、講義や解説はオンデマンドビデオ講義とし、事後学習を課しました。全授業回のうち２回です。なお、ビデオ講義の場合、集中力は長く続きませんので30分程度にしています。

● Zoomを活用した双方向ライブ授業

日本に住む外国人や海外駐在経験者にリアルな体験を聴く授業回が４回あります。コロナ前は、平日の昼間に大学まで来ていただけることが前提でした。2020年よりZoomを活用し双方向ライブ授業にしましたので、社会人講師の選択肢の幅が増え、現在海外駐在している方にも協力いただいています。

《遠隔：リアルタイム・オンデマンド併用》

科 目 名：経営戦略論
担当教員：高井　文子先生（経営学部）
履修学年：１－４年（主に１年）
履修者数：350名

＜授業の実施方法＞

例年は、経営学部の最も大きい教室で講義を行っていましたが、今年度は、ハイブリッド（隔週で登校、Zoom）にて実施という方針になりました。ただ、近接する曜限の必修科目の実施形態（リアルタイムZoomのみ）に学生の利便性等を鑑みて合わせることとなり、講義３回目以降は、ハイブリッドからリアルタイムZoom（録画して３日間はオンデマンド動画も配信）での実施へと途中変更となりました。授業中に投票機能を用いて質問を行うことで、出来るだけリアルタイムでの参加を促しました。

＜授業準備にあたってのポイント・工夫した点＞

● Zoomの投票機能を利用した工夫

例年の授業はかなり大講義となりますが、教室を歩き回って問いかけたり、質問を拾い上げたり、挙手してもらったり、出来るだけそのときの学生の知識量や興味関心に合わせるように心がけていました。それが不可能なリアルタイムZoomでは、投票機能を利用して、事前に５～７個くらいの問題を仕込んでおきました。授業の冒頭は時事的な雑談、授業中盤では、授業内容に関連する質問、授業後半では、本日の内容についてのミニテストなどを行いました。こうした「ネタ」きっかけにして質問や意見をチャットで呼びかけると、単に「何か質問ありますか？」というよりも、Zoomであっても、授業が盛り上がる様子が手に取るように感じられました。

●動画利用の工夫

例年の授業でも利用することがありましたが、動画（業務内容紹介や経営者のインタビューの動画など。多くの場合５分前後。長くて10分程度）を通常の授業よりも多めに利用し、アルバイトや様々な経験が不足している可能性のある状況を補完し、学生が飽きないような構成にするように意識しました。大教室のプロジェクターでは見づらい環境になることもあったようですが、個人の端末での視聴ではそういったこともなく、動画の利用は非常に好評でした。

●オンデマンドの併用について

授業内のアンケートなどを踏まえると、「オンデマンドのみ」という学生は意外とそれほど多くはなく、他の授業の課題や宿題の進捗、家族の在宅勤務の状況などによって、併用している学生が多かったのではないかという印象があります。またリアルタイムZoomで参加していたが、一部見直したい部分がある場合はオンデマンドを視聴した、という声も多く聞かれました。これについては、授業後に授業内容を繰り返すような質問を防ぐことになったでしょうし、学生の学びにとってプラスになる効果があったのではないかと思います。

《遠隔：リアルタイム》

科 目 名：総合的な学習の時間の理論と実践
担当教員：金馬　国晴先生（教育学部）
履修学年：１年
履修者数：100名

＜授業の実施方法＞

この科目は１年生の第４タームの12月・１月に当てられています（教育学部では珍しく短期間で１単位）。２か月間でかなりの能力を身に付けてほしいので、テキスト１冊＋αを予習、講義中、復習、自習でも使うものとしました。昨年（2020年）と今年（2021年）は毎回オンラインで行なわざるをえなかったため、Zoomではテキストの質問会とレクチャーや映像視聴、それらに関するブレイクアウト機能での討論を中心として進めた上で、宿題として毎週の、授業支援システムの「ディスカッション」機能を使った小レポートの提出と、「返信」機能を使った意見交換を組み合わせるようになりました。（この小レポートは、以前の対面の時代には、講義中に書いて提出してもらったものでした。）

なお、授業支援システムの「ディスカッション」機能は、学生が相互に見られ「返信」コメントも書き込める点が優れています。教員としては彼らのやりとりに任せることとし、コメントは全員それぞれに対してでなく、学生たちに混じってたまに書き込むにとどめました。教員から評価を受けるためとか、教員の意見が常に正しいとかという一方向のレポートにしないためで、複数の友達からの多面的なコメントこそためになると感じてもらう意図もあります。

＜授業準備にあたってのポイント・工夫した点＞

Zoomの「ホワイトボード」機能を、一斉にお絵描きなどして慣れた後で、「ブレイクアウト」で各チームでの討論記録に使ってもらいました。グーグルの「ジャムボード」も併用し始めましたが、こちらの方は教員や学生が他のチームの記録を、作業の途中でも、また中間発表会でも、講義後の復習でも、互いに見られる点で便利でした。（ただし無料版は、１つのリンクで50人しかログインできないのが難点。）

また、小レポート代わりの宿題として、授業支援システムの「掲示板」の方に、SDGsの17のターゲットごとの欄を作り、子どもや友だちと観て考えたい動画や写真などのサイトを、理由や授業案とともに投稿してもらいました。授業の中では、「ブレイクアウト」機能で少人数に分かれ、投稿したものを順番に、画面共有をし合いながら説明し、質問やコメント、アドバイスを言い合う回を設けました。

なお、「ブレイクアウト」では、ランダムに振り分ける以外にも、テーマに関連する分け方（参加者と議論したい内容など）や、ときに基礎演習のクラスごと（とはいえ20名では多いので５名か10名ずつ）や出身地ごとで組んだりして、交流を広げてもらっています。とくにオンラインが続いた時期は話せてうれしかったようで、教員の資質としても重要なコミュニケーションの実感が得られたのだと思っています。

《遠隔：オンデマンド》

科 目 名：教育の思想と歴史
担当教員：橘髙　佳恵先生（教育学部）
履修学年：２年以上
履修規模：140名程度

＜授業の実施方法＞

教科書として、文献１冊を指定するとともに、私からは、スライド教材と音声教材により、当日の範囲についての補足説明とディスカッションのテーマを提示します。どちらも、授業開始時刻に合わせて公開していました。学生は、スライド教材と音声教材を踏まえて当日の範囲を読み、授業支援システムのディスカッションにおいて交流します。ディスカッションは、学生のインターネット環境等を考慮し、二日間ほど期間を設けました。

＜授業準備にあたってのポイント・工夫した点＞

学生間の交流の機会を保障することと、議論の深まりを重視しました。そのため、ディスカッションの投稿において疑問点を尋ねたり、学生間で返信したりすることなどを推奨しました。毎回のディスカッションについて、翌週、幾つかの投稿を取り上げつつ振り返りを行うことにより、私からの応答も伝えていました。なお、このディスカッションへの参加と学期末リポートにより成績を評価しています。

学生からの声として、授業支援システムのディスカッションにより、他の多くの学生の多様な考えに触れることができ、楽しかったというものが寄せられました。従来の対面授業では、履修規模の大きさもあり、全体の前で発言する者は少数でした。そのため小グループでの交流に重きを置きましたが、この場合、学生が対話できる範囲には限界がありました。オンライン上のやり取りが、この授業においては、学生間の交流の広がりと議論の深化につながったように思います。

● 演 習 科 目

《対面・遠隔併用》

科 目 名：身体と空間のデザイン
担当教員：藤原　徹平先生（都市科学部）
履修学年：１年
履修者数：60名

＜授業の実施方法＞

リアルタイムの遠隔による授業では、事前に出題した課題をグーグルスライドに貼りつけて提出。そこからセレクションされた20名がオンラインで発表、教員とTAの複数名でクリティークします。クリティーク終了後にミニレクチャーを行います。トータル120分の講義。優秀者の課題を集めたスライドをPDF化し、教材として活用します。毎週の学生の演習成果をそのまま生きた教材として活用することで、課題への意欲と好奇心を刺激する形としています。造形演習は対面とすることで、遠隔と対面とのメリハリがある状態をつくっています。

＜授業準備にあたってのポイント・工夫した点＞

本講義で出題する課題には二つのタイプがあります。

一つ目が、学生それぞれが人生の中で経験してきた環境や、課題のテーマに沿って都市を彷徨い発見した環境を、観察し図面・ドローイング・テキストでプレゼンテーションする課題です。こちらは、オンライン講義で実施しました。教室で行うとどうしても教員／プレゼンテーションする人／聞く人という非対称性が生れてしまいますが、オンラインだとフラットに議論ができる感覚があります。また、オンラインでグーグルスライドに提出をしてもらい、セレクション作品をPDFで毎週学生に配布しています。そうすることで、他の学生の手法を毎週の提出の中で学び、相互学習をしていくプロセスを時間差無く取り入れることができ、対面で実施するよりも表現力や観察力の底上げにつながっていると感じます。今後コロナ禍が明けてもオンラインで実施しようと考えています。

二つ目の課題は、造形演習です。横浜国大の建築学科は習作模型に対する指導に対してしっかりしたメソッドがあります。たくさんの習作模型を持ち寄り、模型の差異を教材にして学んでいく方法なので、対面で実施する必要があります。人数を絞るために、授業時間を二つにわけ、２グループにわけて講義を実施したのですが、それも効果があると感じました。演習における教員と学生の比率の重要性を改めて感じました。

なお、遠隔講義でセレクトされた課題を教員とTAでクリティークする際、クリティークは事前に打ち合わせはせずに、TA２名それぞれの視点で選んでもらい、TAが選んだ視点も講義で発表してもらっています。TAにとっては、クリティークに参加することで彼らの教育にもなり、学部生からすると大学院生のレベルの高さを理解して、学習意欲につながります。オンラインになることでＴＡと教員間での対話の質と量が高まったように思います。

《遠隔：リアルタイム》2科目

科 目 名：Proseminar #2
担当教員：長谷川　健治先生（国際戦略推進機構）
履修学年：２～４年生
履修者数：６名

＜授業の実施方法＞

オンラインリアルタイム授業で、宿題の文献購読を元に学生が考えた質問・問題提起に応答する形で実施しています。

授業前日までに授業支援システム上の掲示板に質問・問題提起を投稿させます。これらの質問・問題提起を元に、授業内のミニ講義とディスカッションを実施しています。

＜授業準備にあたってのポイント・工夫した点＞

遠隔授業に限定されることではありませんが、宿題の文献をしっかり読んだ上で授業に参加させています。毎回必ず発言機会が回ってきて、受講生一人一人の質問と問題提起を中心に授業が進められることを初回から強調しています。

受講生の大半は渡日できていない留学生なので、時差の影響が比較的少ない５限に設定しました。

また、オンラインリアルタイム授業に学生が参加しやすくなる工夫として、授業支援システムの「掲示板」上に事前にディスカッションの元となる質問・問題提起を投稿させています。授業中は、学生による質問・問題提起と教員による応答という一対一のやりとりの繰り返しに止まらず、学生がより自由に発言できるよう、適宜学生たちに関連する問題を投げ返すようにしています。

この授業は少人数なのでブレークアウトルームは使用していません。他の授業で使用する際は、対面授業と同様、各グループの代表者を決めてグループ内で話し合った内容を発表させています。

科 目 名：英語演習1b
担当教員：渡辺　雅仁先生（国際戦略推進機構）
履修学年：２年以上
履修者数：14名

＜授業の実施方法＞

英語での異文化交流を目的に海外の英語教育機関と連携し、仮想交流（virtual exchange）を行っています。今年度は、従来のインターネット上の掲示板での作文投稿に加え、オンラインリアルタイムでのワークショップ・交流と、より仮想性を高めた非実在の人物との交流を行いました。

＜授業準備にあたってのポイント・工夫した点＞

2000年度から毎年継続しているインターネット上の掲示板を用いたさまざまな国からの英語学習者間の異文化交流プロジェクトを、コロナ禍で進んだ遠隔授業関連ツールを活用し、交流がより深まるよう授業をデザインしました。

今回は、その中でも、対面によらない仮想交流（virtual exchange）を、3つの形態で行いました。

交流１：非同期（asynchronous）　書きことば（written language）による交流
従来のインターネット上の掲示板へのメッセージ投稿による交流

交流２：同期（synchronous）　話しことば（spoken language）によるオンライン交流
i. Zoomを用いて、国内のNGOに依頼し、受講生を通じてオンラインワークショップを２回開催しました。
ii. Zoomを用いて、交流1に参加した各国からの参加学生、教員とリアルタイムで英語によるセッションを開催しました。

交流３：非同期・書きことばを用いた存命していない人物との交流英文テキスト学習として、テキストに登場する人物に対し、１）自身との関わり、２）地域・国との関わり、３）世界との関わりの３つの視点から、同世代の若者として英文で手紙を書いたり、パワーポイントを用いてスライド発表をしたりしました。

また、オンラインリアルタイム授業に学生が参加しやすくなる工夫として、さまざまな形態の交流を用意することで、この場はカメラオンで討論する、この場はカメラオフで講義を聞く、この場は自分の発表を行う、といった形態に合わせて学生の授業に参加する形態を変えました。カメラオンのまま、オフのままといった画一的な形態ではなく、複数の参加形態を用意しました。現在は、カメラオフが原則となっていますが、必要に応じてカメラオンとできるような、セキュリティ強化が可能になるとよいと思います。

● 実習・実技科目

《遠隔：リアルタイム・オンデマンド併用》2科目

科目名：J502-総合日本語
担当教員：中川　健司先生（国際戦略推進機構）
履修学年：留学生（履修年次の指定なし）
履修者数：10名前後

＜授業の実施方法＞

本科目は、教科書として『新訂版トピックによる日本語総合演習上級』（安藤節子他著）を使用しています。同書の内容は、「食文化」「仕事」「ジェンダー」等のトピックごとに、文法練習、読解、データ提示からなっています。

文法練習については、文法項目を説明する動画をオンデマンドで配信し、履修学生はそれを見て、文法問題を行い、グーグルフォームで提出します。リアルタイムZoom授業では、学生の提出した課題を、全体で共有しながら、意味や用法について確認します。

読解については、読解の本文を音読したものをオンデマンドで配信し、履修学生はそれを聞きながら内容理解の問題を行い、グーグルフォームで提出します。読解についてもリアルタイムZoom授業では、学生の提出した課題を、全体で共有しながら、意味や用法について確認します。

また、教科書で扱われているテーマに関連した日本の新聞記事の内容を発表し、それについてZoomのブレイクアウトルームでグループごとに議論するという活動も行っています。その場合も、そこで出た意見を、グループごとにグーグルスプレッドシートに記入するようにしています。

授業後にそれぞれの発表について、LMSのアンケート機能を使って、コメントするという課題も課しています。

＜授業準備にあたってのポイント・工夫した点＞

通常の学期は、同じ教室で授業を受講しているため、その意味で一緒に勉強しているという一体感は自然に醸成されてきますし、出身が異なる留学生たちがお互いの文化について知るということも期待できるのですが、昨年来、日本に入国できていない者が一定数おり、なおかつオンラインで授業を行わなくてはいけないという制約がある中で、リアルタイムで他の学生とのインターアクションが期待できる時間はとても重要だと考えています。そこで、リアルタイムでの活動時間を有効に使うことができるように、オンデマンドの部分では、学生が自分のペースで学習できる内容のものを割り当てるようにしました。具体的に言うと、文法練習、読解教材の語彙学習、読解の精読といったものです。これらの課題をこなすのに必要な時間は、学生によって大きく異なります。

また、学生全員がテーマに関する新聞記事について発表し、その内容に関するディスカッションを行うという活動を行っていますが、その際には、発表からディスカッションにスムーズにつながるように、発表部分は、録画ではなく、リアルタイムにしています。発表に関しては、事前に提出させたレジュメをLMSにアップロードし、ほかの学生が発表の内容を事前に知ることができるようにしています。

科 目 名：中国語実習１・２
担当教員：新沼　雅代先生（国際戦略推進機構）
履修学年：主に1－2年
履修者数：40名×4クラス

＜授業の実施方法＞

この授業では中国語を学生にゼロから教えます。学生の事情に合わせて①Zoom使用のリアルタイム、②Zoom不使用のリアルタイム、③オンデマンドのいずれでも受講できるように授業を準備しました。各回の授業は３パートで構成しました。第１パートはパワーポイント資料と講義音声による約30分間の解説、第２パートは問題を解いたり課題を作成したりといった作業です。作業は音声録音・中国語の筆記・タイピング練習などバラエティのあるものにしました。第３パートはZoomによる発音練習、質疑応答、応用会話練習です。諸事情によりZoomに参加しない場合は、別途用意した中国語学習システムで練習をさせました。この学習システムは文法だけでなく発音の練習もでき、周りを気にせず発音練習したいという学生には向いていたようです。学習システムの進捗度は学生ごとに定期的に確認していました。学習システムのゴールを学期初めに提示して、学期末での進捗度に応じて評価しました。その他にLMSを使用して中間試験や毎回の小テストを行いました。これらを通じて学生にLMSの試験に慣れてもらい、遠隔でスムーズに期末試験が行えるようにしました。

＜授業準備にあたってのポイント・工夫した点＞

● 授業準備の工夫

コロナ禍にある現在は色々な面で「不安定」なので本授業はとにかく「安定したもの」、「先の見通しが立つもの」にすることを重視しました。具体的には、学期の初めに全16回の授業をLMSで作成して全体計画を学生に示しました。第１、２回までの授業は内容を確定しておき、第３回以降は配布資料も含め85％程度の完成度で作っておきました。各回の授業内容は遅くても授業前日の夜までには確定しました。授業の進め方に「型」を決めて、学期を通じて変更しませんでした。小さい工夫ではありますが本授業がルーティン化されることで学生が突然の変更を心配する必要が無くなり、その分自身の生活や他の授業のスケジューリングがしやすくなると考えました。

●中規模クラスにおける「授業の質」の担保

言語に関する内容ばかりだと学生も疲れてしまうので、授業では中国語圏の文化や社会についても折々に紹介しました。中には面白いと思ってくれた学生もいるでしょうし、関心がない学生もいたと思います。後者の学生には問題を「クリアすること」に楽しさを見出させ、モチベーションを保たせる工夫をしました。具体的には、LMSのテスト機能を活用した「出席PW探し」をルーティンとして組み込みました。資料は視覚的に分かりやすいものにし、親しみやすいイラストを載せました。３パート構成によって90分の授業にメリハリをつけました。

CENTER NEWS

開催報告 2021年度 横浜4大学 第7回ヨコハマFDフォーラム

本学は現在、神奈川大学、関東学院大学、横浜市立大学とFD活動の連携に関する包括協定を結んでいる。この大学間連携事業の主たる事業として、「ヨコハマFDフォーラム」を共同開催している。第７回目となるフォーラムは、「大学における教養教育を、今一度、考える ～学生とともに考えるウィズ&ポストコロナ時代の大学教育～」と題して、2021年12月４日（土）の午後に、Zoomを利用したオンラインのライブ形式で開催された。

このフォーラムは、時流に沿った大学教育の課題について、参加した教職員と学生が情報を共有すると同時に議論を行う場として活用されている。第７回フォーラムは、前回の第３回フォーラム以来４年ぶりに本学が主催校となり他大学との協議を進めた結果、新型コロナウィルスの影響により大学でのオンライン授業が取り入れられるようになって以降、実施形式も含めいろいろな検討が継続されている教養教育について、いろいろな切り口で考える内容を取り上げることになった。

最大で107名の参加があった第一部では、本学の教育・情報担当理事である谷地弘安副学長にご挨拶とフォーラムの趣旨説明を頂き、その後、４大学から教養教育科目に関するオンライン授業の事例などが報告された。神奈川大学からは、オンライン英語授業の事例について、教員と学生の双方の視点から報告があった。関東学院大学からは、教養教育科目の再考に関する内容について教員と学生の双方から報告があった。本学は、これまでの本学における教養教育改革の歴史とその方向性および新しい取組などを高大接続・全学教育推進センターの松本真哉副センター長が報告し、その後、３名の学生と全学教育科目の内容や実施形式などについて、短い時間ではあったがパネル討論を行った。最後に登壇した横浜市立大学については、教員が現在の教養教育科目の特徴と内容などを報告し、その後実際に科目を履修した２名の学生から科目や履修に関する報告があった。

その後、第二部として、Zoomのブレイクアウトセッションを利用したグループ討議を行った。グループ討議は５名程度に振り分けられた６グループで行われた。また討議の課題については、各グループで自由に決めることにした。討議のグループには必ず学生が含まれており、学生の発表内容や意見を基に議論が展開されたグループが多かった。20分程度の討議後、各グループの討議内容や意見などを全体で共有したが、本学が導入している高年次履修制度に関する関心が高かった印象が残っている。最後に次回の主催校である横浜市立大学の横山崇先生のご挨拶を頂きフォーラムは閉会した。

参加者からのアンケートでは、「他の大学生がどのような授業を受けていて、どのように感じているのか、また教授の立場からどのように考えているのかは、学生の立場からしても気になることだったので、とても有意義でした。」（学生）、「教員側と学生側の視点からお話を聞くことができましたので、今後の授業運営に役立てることができると思います。」（教員）等々、「とても満足した」との声が多数寄せられた。次回の第８回フォーラムは、横浜市大を主催校として次年度開催される予定である。

―高大センターからのお知らせ―

【学生IR、FD活動の報告書類の公開】

学生の学修・生活行動の分析結果や卒業・就職先調査結果など、各種学生IRおよびFD関連の情報は、サイボーズ内に公開フォルダを設け、関係各部局にて適宜参照・入手できるようにしています。必要に応じて学生サポートや教育改善にご活用ください。

■ 格納先:サイボーズ＞ ファイル管理 ＞ 高大接続・全学教育推進センター

■ 提供文書の取り扱い：学内限定公開(本学教職員のみ)を含みます。学内限定公開文書のダウンロード後の取り扱いについてはご配慮ください。

横浜国立大学 AP/FDニュースレター 第17号（通号43号）

発行：令和４年（2022）年 ２月　編集・制作：高大接続・全学教育推進センター

Email：aec-fd@ynu.ac.jp

ホームページ：www.yec.ynu.ac.jp

大学教育再生加速プログラム